

読解『失樂園』(二)

道家弘一郎

A Reading of *Paradise Lost* (II)

The scenes of Books I and II of *Paradise Lost* are set in Hell, which is an appropriate place to represent the condition of the human world. However, only angels are depicted in this Hell. Judging from the typological view-point of the poem, these fallen angels are regarded as the types of fallen men and women who live on the Earth after their Expulsion from Paradise. Additionally, these fallen men and women are prey to all kinds of fierce maladies, and can only pray for salvation from their present predicament.

In Book III, their prayers are answered. The dialogue between God and the Son is mainly about the redemption of man. This portion, considered to contain the most sublime lines in the poem, expresses the most significant biblical message in its full form. In the Bible, God said to Abraham, 'I am the Almighty God;...and be thou perfect.' (Gen.17:1). "Almighty" and "perfect" are the principal key-words necessary to explain the reason why there must be the Cross of Jesus Christ in Christianity. Book III contains the promise---unknown to man---of his redemption between God and the Son in Heaven. The process in which the promise is delivered to man is depicted in Books XI and XII, in both of which the order of "first," "second," and "last" is important. The order in Book XI and Book XII is Adam, Noah, and Christ; and Abraham, David, and Christ, respectively, although the name "Christ" does not appear in this great Christian epic.

二、贖罪・創造・審判

『失樂園』の世界が地獄の描写で始まったことは、ダンテの『神曲』の場合と同じである。文学はなによりも人間の置かれている現状から出発しなければならぬ、とすれば、そうなるのは当然であった。しかし、『失

樂園』第一・二巻において地獄で苦しむものは天使であって人間ではない、といわれるかもしれない。前章において述べたとおり、『失樂園』第六巻までは、いわば超越界の磁場の設定であり、「人間」誕生以前の前世史の叙述である、やがて人間が置かれることになる世界の予型 (type) であり前触れである。それゆえ、墮落後のわれわれ読者は、天使たちの墮落に自分たちの墮落を重ね合わせ、墮天使たちの窮状に感情移入して共感するのである。『失樂園』のなかで結局、人間の地獄は描かれないうままである。なぜなら、アダムとイーヴが樂園を追放されるところで物語は終るのであり、それ以降、キリストの受肉を中心として、最後の審判に至るまでの人間の歴史が、予測として教えられるだけである。したがって審判後の地獄の描写はない。地獄としてはただセイタンたちの地獄が描かれるだけである。

しかし人間が現世を地獄と感ずることもまた紛れもない事実である。第十一・十二巻の描写がそれである。第十一巻四八〇—四八九行にみられる、あらゆる種類の病気の列挙、癩病 lazarus、痙攣 spasm、嘔吐 qualm、心臓麻痺 heart-sick、熱病 fever、発作 convulsion、癲癇 epilepsy、加答兒 catarrh、腸結石 intestine stone、潰瘍 ulcer、疝

痛 colic、錯乱 phrenzy、鬱病 melancholy、狂気 madness、萎縮症 atrophy、消耗症 marasmus、疫病 pestilence、水腫 dropsy、喘息 asthma、^{リュウマチ} 痲質斯 rheum、日英いずれの言語においても、いかにも禍々しい。病人たちは「絶望」に圧しつぶされる。「死」こそ「最高善 chief good, i.e. summum bonum」。「最後の望み」(11493)として哀願するが、それもかなわないという有様。この残酷な光景に、アダムは涙を流し、「ああ、なんという悲惨な人間の姿！ O miserable mankind」、いっそ生まれてこなければよかったのに、と嘆く(11500-514)。

これに対して想いおこすのは、セイトンが新世界探求に出かけて留守の間、墮天使たちは地獄に在りながらも、おのおの自己の好みにしたがって馬上試合に興じたり、音楽を奏でたり、哲学談義にふけったり、あるいはまた地獄の地理探険に出かけたりする、その優雅な暮らしぶり(2506-628)である。これと現世の人間の病気の惨状(11477-514)とを比べたら、いったいどちらが地獄かといいたくなるほどだ。

『失楽園』冒頭のインヴォケイションが示すとおり、原罪が死と苦しみをもたらし(114)、その苦しみが極救い 点に達したとき、人はおのずから「此の死の体より我を救はん者」(ロマ724)を求めずにはいられなくなる(145)。それに応えるのが第三巻である(因みに三は神の数、四は人の数であって、アダムとイヴが登場するのは第四巻である)。

第一巻のインヴォケイションが全巻を見渡し、詩の目的を宣言する公的 (public) な性格をもつのに対して、第三巻のインヴォケイションは大胆に私的 (personal) である。失明の苦しみを告白しながら、それを乗りこえ「不可視の事柄 (things invisible, III. 55)」を語りしめたまえ、と祈る。「聖なる光 (holy Light, III. 1)」に呼びかけるインヴォケイションも、父なる神を「光の泉 (Fountain of Light, III. 375)」と称える賛歌も、シェリーがミルトンを「光の子」

(Adonais, 36) と呼ぶにふさわしい。第一巻の悲痛な地獄の光景が、「光にはあらず、むしろ眼にみえる暗黒 (darkness visible, l. 63)」のなかに浮んでいたのとは正反対に、第三巻では溢れるばかりの光のイメージが眩しく、「天使のなかで最も輝しい熾天使セラフでさえ、両つの翼で眼を覆わなければ近づけない」(三381-382) ほどである。

その神が最初に語るのは「贖罪」である。生老病死の四苦からの解脱は仏教も説くが、贖罪を説くのはキリスト教のみである。ここにキリスト教の最大の特徴がある。『失樂園』においても、創造よりも審判よりも先に贖罪が説かれる。何故か。人間実存の急務だからである。救いが悟りや諦めや解脱とはならないで、あたかも外科的な手術のごとく贖罪となるのは、神に「完全」の意識、「完全」を求める要求が強いからである。

創世記第十七章一節、主はアブラムに現れて、「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい」という。御子キリストも、「天の父が完全であるように、あなたたちも完全な者となりなさい」という(マタイ548)。主はまたモーセ(とアロン)に言った、「わたしは聖なる者であるから、あなたたちも聖なる者とならなければならない」と(レビ記11-45)。使徒ペテロはこれを根拠に、「あなたがた自身も、聖なる者になりなさい」と語る(1ペテロ1-15)。このおよそ人間には不可能な命令が、旧新約聖書には一貫しているのである。この不可能を可能にする途を、神自身が講じたのである。それが第三巻、父と御子との間で交わされる「贖罪」の問答である。

全能の神

ところで、人に完全であれと要求することができるのは、神が全能の神であるからである。「全能の神」という言葉が聖書に登場するのは、この創世記十七章一節が最初である。原語は「エル・シャッダイ」であるが、七十人訳で「全能の神」と訳されて以来（岩波版月本昭男訳『創世記』46）、欽定英訳も「the Almighty God」とあり、それはそのまま現行のわが新共同訳にも踏襲されている。シャッダイの意味はアッカド語の「山」に由来し、「山の神」「高き者」、あるいは「野の神」「強き神」「主」「乳房」「稲妻を」投げつける者」などが挙げられるが、通説はまだない、という（岩波版木幡・山我訳『出エジプト記レビ記』22）。

だが、エル・シャッダイの前にもアブラハムは「エル・エルヨン（いと高き神）創一四18-20、22」、また側女ハガルを介して「エル・ロイ（わたしを顧みられる神）創一六13」という名称で知っていたはずである。神の属性は時間を追うて彼に啓示されていた。こうしてエル・シャッダイが、アブラハム、イサク、ヤコブの父祖三代の神の呼称となり、彼らにはどの場合も子孫の繁栄と安寧を約束する神であった。

だが創世記十七章一節「われはエル・シャッダイ。わが前に歩みて、^{まっ}完全かれ」は、実は詰責の言葉であったのである。九十九歳のアブラムは、妻サライも九十歳で受胎可能な年齢をこえていることを知っていた。しかしこのとき、神はなおこの夫妻に男の子を与えることを約束し、アブラム（高き父）をアブラハム（多くの国民の父）に、サライをサラ（ともに「女王」）に改名せよ、と語る。思わずアブラハムは「顔を伏せて、笑った」（創十七17）。理由はいうまでもなく、二人の高齢である。神は、彼のこの不信を咎めたのである。「全き者であれ」を「非難されない者であれ」（秦剛平）とする翻訳もある。英訳は「perfect」であるが、独訳は「fromm」（敬虔な、誠実な）、仏訳は「intégrer」とあり、ラテン語の「integer」（in + tangere, i.e. touch 触れられない）、完全な、潔白な）に由来する。ただしウルガタ・ラテン語訳は「perfectus」。

欽定英訳で 'perfect' は、アブラハムの前、ノアについて用いられたのが最初の用例である。'Noah was a just man and perfect in his generations,...' 「ノアは義人にして其世の完全き者なりき、…」(創六9)。ここが独訳では「義人」に fromm を用い、「完全」に ohne Tadel (叱責・非難すべき欠点のない、完全無欠の) を当てている。仏訳では just と intègre である。ウルガタ訳は iustus と perfectus。これによって聖書において「完全」が何を意味するかが見えてくる。マタイ伝五章四八節(「天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」新共同訳)において、英訳は perfect、独訳は vollkommen、仏訳は parfait である(語源はいずれも「最後まで徹底的に成し遂げる」と)。

溯って、エル・シャッダイを「全能の神」と訳した七十人訳ギリシア語はラテン訳はもとより、英独仏の近代語すべてに踏襲されている。ただし、「自然」の領域では不可能と思うのが当然のアブラハムを叱責し、不可能を可能にかえ、実現する力が神にはあることを信ぜよ、と命ずるのである。

だが、神の全能をもってしても不可能であることがある。神は不義・不潔・不正・不完全、つまり悪であることはできない。レビ記十一章四五節は、「我聖ければ汝等聖潔なるべし」という。英訳は holy、独訳は heilig、仏訳は saint である。この一節を踏まえたペテロの勧告(1ペテロ15)も、聖、holy、heilig、saint をそのまま用いている。

アブラハム パウロがロマ書で、信仰によって義とされることを説くとき、その実例として挙げるのはアブラハムの模範である(三―四章)。アブラムが生まれ故郷カルデアのウルなる父の家を離れて出発したとき、妻のサライは

不妊の女であった(創十一27―十二4)。エジプト滞在中は妻を妹と偽ってファラオの後宮に差出し、命を助かるばかりか、栄耀を楽しむ罪もおかした(創十二10―20)。さらにサライの勧めとはいえ、サライの女奴隷ハガルを側

女として子供を得ようとした(創十)。それでもなお九十歳のサラに子が授かるという神の言葉を聞いたとき、思わず彼は顔を伏せて笑ったのである(創十七17)。アブラハムは、かならずしも単純に「信仰の模範」(ロマ四12)とはいえない。しかるにパウロは、信仰の模範と断定することに、なんの躊躇もない。新約聖書冒頭は、ヨハネ伝のような神学論・哲学論でなく、「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」である。マタイ伝第一章第一節は、ただこれのみ。アブラハムもダビデも罪の子であった。

しかし、罪が放置されてよいはずはなく、また放置されることもなく、アブラハム、ダビデの裔すえにイエスが誕生する。イエスのみは神と等しく「全く」「聖き」人間であった。人はすべてイエスに接ぎ木されて一体となることになり、イエスと等しく完全な聖なる生命が人のなかに流れ込み満ち溢れるのである。彼イエスは「神の栄光のかがやき、神の本質の完全な現れ」(ヘブル一3)であったからである。

『失樂園』第三卷に至り、神が初めて登場するに当り、父なる神を‘the Almighty Father’ (Pl. III. 56) と呼び、御子をあらわすにヘブル書の言葉を借りて「神の栄光の輝かしき像すがたである御独子 (The radiant image of his glory... / His only Son, III. 63-64)」といい、「御子の表情は比類を絶した栄光に包まれ、父なる神の本

質そのものが燦然と輝き出ていた (Beyond compare the Son of God was seen / Most glorious; in him all his Father shone / Substantially expressed...; III. 138-140)」と称えることは、神を何よりも先に「贖罪の神」として扱っていたことを示している。

そればかりか、御子が「父の右に (on his right, III. 62)」座っていたということにも注目しなければならない。「神の右に座る」というのは、聖書では最高法院で死刑の判決をうけたイエスがみずから、いずれ神の子メシア(キリ

スト)であることが明らかになる、と語る箇所である。「あなたたちはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る」(マタイ二六64、そのほかマルコ一四62、ルカ二三69)。これはイエス自身の預言であるが、旧約の詩篇一一〇篇一節に溯り、使徒パウロによっても、復活後の神の子の姿として繰返し、預言されることである(ロマ八34、エペソ一20、コロサイ三一)。それを最も「芸術的な香り」(前田護郎『新約聖書概説』340)ゆたかに表現したのはヘブル書であり、その第一章二節以下、三節には「罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右の座に」着いた、とある。贖罪と結びついていることは、一〇章一二節にも「罪のために唯一の永遠のいけにえを献げた後、神の右の座に着」いたとあり、十二章二節にも「御自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右に座るに至った」とあるのによっても明らかである。

しかし、旧約にはもちろん、共観福音書にもまだ無かったが、使徒たちになると、「キリストの神性」を示すために「キリストの先在」が語られるようになる。パウロは、第一のアダムは地から出て土に属したが、第二のアダム(キリスト)は天から来る、といい(1コリント一五47)、また「キリストは神の身分であり…神と等しい者」(ピリピ二6)として単に先在しただけでなく、創造にも関与し、「万物は御子によって…御子のために造られた」(コロサイ一16-17)と語る。キリストの先在は、そのほか、ヨハネの黙示録にも見られる(二17、二二13)。が、最も徹底した告白はヨハネ伝第一章に見出される(一1-3、14、そのほか三13、六33-51)。しかし、先在の居場所を「父の右」とした記事が聖書にはない。復活後の居場所が上述のごとく「父の右」であるならば、地上へ降る以前の居場所も「父の右」であった、とミルトンは考えたのである。「右の座」とはもちろん、天使に勝り、天使たちも皆、彼を礼拝しなければならない、神と等しい彼の権威をあらわす。としたら、一体そのような彼が、何のためにわざわざ地上に降らなければならなかったか。それは贖罪のためであった。

第三卷

神は被造物の一つだに滅びることを望まない。まして人間は、最後に造られたとはいえ、その愛おしさは最高である（二三七六―二七八）。それを最もよく知るものは、悪魔だ。復讐の念に燃える彼は、人間を神に背かせること

とが、神への最大の報復であると考ええる。神は、セイトンが遂に目的をとげ、人間は、セイトンの詭いの虚言に耳を傾け、「服従の唯一のしるしである、唯一の命令 (the sole command. / Sole pledge of his obedience, III. 94-95)」に背いてしまふ、ことを予測する。そのような背信の責任は、自由な主体として造られた人間がみずから負わなければならぬものである。しかし、人間はセイトンに欺かれて墮落したのだから、セイトンとはおのずから違った扱いをしようとして、神はいう。

Man therefore shall find grace;

The other, none. In mercy and justice both,

Through Heaven and Earth, so shall my glory excel;

But mercy, first and last, shall brightest shine.

III. 131-134.

OED の *grace*, *mercy*, *justice*, *glory* の語の意味を辿れば、次のとおり――

grace: 11.a. The free and unmerited favour of God as manifested in the salvation of sinners and bestowing

of blessings. (罪人を救い祝福を与えることに示される、神の自発的な無償の好意)

mercy: 1.b. God's pitiful forbearance towards His creatures and forgiveness of their offences. (神の被造物への憐みぶかい忍耐、彼らのおかす罪科の赦し)

justice: 1. † 2. *Theol.* Observance of the divine law, righteousness; the state of being righteous or 'just before God'. *Obs.* (律法の順守・[正]義、義へへある、即ち「神の前に義へへある」こと)

glory: 2.b. *the glory of God*: the honour of God, considered as the final cause of creation, and the highest moral aim of intelligent creatures. (創造の最終目的(もへへは目的因、究極因)と、また知的被造物(人間)の最高の道徳的目的と考えられる神の名誉)

こうして一語一語を手繰りよせていくと、じわりと神の好意が伝わってくる。「祝福する」と訳される *bless* の原義が *'to make holy with blood'* (寺澤芳雄『英語語源辞典』133) であることには驚いた。しかも、古典語にもゲルマン語にもロマンス語にも同族語は例証されていない、という。'grace' という最初のうるわしい言葉のなかに、すでに、ただならぬ事態が予想される。

義の
実現

エゼキエル書一八章四節には「罪を犯した者は必ず死ぬ」とあり、ヘブル書九章二二節には「血を流すことなしには罪の赦しはありえない」とある。これが justice の第一義である。義は全うされなければならない。しかし、義が全うされればアダムは死ななければならない。だが、そのような結末は、父の御心からは最も遠いことである(三153-154)。最愛の末息子だが、彼自身の愚かさによるとはいえ、策謀の罠にはまって、失われてしまうとは(三150-153)!! そうなれば父の善と父の偉大さは、ともに弁解の余地がないほど、傷つき瀆(けが)されるだろう、と御子は答える(三165-166)。父は、この御子の言葉を、父の胸中をあますところなく語ったものとして喜び、「わが胸の子よ、たゞひとりわが言葉、わが知恵、わが意実現の能力(ちから)ある子よ (Son of my bosom, Son who art alone / My word, my wisdom, and effectual might... III. 169-170)」と呼びかける。

一七三四年の注釈本、J. Richardson (1665-1745) の *Explanatory Notes and Remarks on Milton's Paradise Lost* では My—Effectual Might の語義として My Executive Power. と記し、参考箇所として III. 391 (By thee created). V. 720. VI. 682, 683. VII. 175. をあげている。とりわけ当該箇所(三170)では、創造ではなく救済に力点がある。

また 'effectual might' はクリストテレスの efficient cause (動力因、作用因) を連想させる。それもそのはず、十六世紀には「動力因」が 'effectual cause' といわれた (*OED.* 43)。また effectual grace は「救いに選ばれた人々に与えられる特別な恩寵」(*OED.* l.b.) とある。先の引用において示したとおり glory が目的因なら、justice は形相因、mercy と grace は動力因、Man が質料因とはいえないだろうか。この mercy と justice とを一身に具現した者——すなわち、あるべき人間の姿 justice 義(形相因)も、それを實現する力 mercy 愛(動力因)をも兼ねそなえた者が、イエス・キリストであった。

救いへの意志

人間の救いは、父によって約束された (Man shall not quite be lost, III. 173)。しかし、救われんことを願う者だけが救われるのだ。ただし、その意志は、その者の内なる意志よってではなく、「自由に与えられるわたしの内なる恵寵 (grace in me / Freely vouchsafed, III. 174-175)」による、という。これは、先に引用した *OED* の語義そのままだである。神の立場に立つては、free, freely は神が「みずから自発的な意志で」与えたもろことをあらわすとともに、「何の代価もなく、無料で、無償で」という意味になるであろう。*OED* における unmerited は、free の後者の意味を反復強調したものである。人間の立場からは free は「無料・無償で」、unmerited は「自分には、何の値打ちもない、値しない、不相応な、勿体ない」という意味になるであろう (同じく、'Forbidden knowledge by forbidden means. (XII. 278-279)' という行がある)。your unmerited by me, who sought / Forbidden knowledge by forbidden means. (XII. 278-279) という行がある。』。というのも第三卷では、そのあと父は続けて、'Upheld by me' (III. 178) 'By me upheld' (III. 180) と重ねて、わたしに支えられてこそ悪魔とも互角に戦い、人間の墮落した状態がいかに弱く脆いかも覺り、「救いがすべてわたしに、わたしだけに負う (to me owe / All his deliverance, and to none but me, III. 181-182)」ものびあることを知るだろう、という。この二行は、人間の側には少しの善もなく、「救われんとの意志」すら神からの恩寵であることを示している。

神はこの「特別の恩寵 (peculiar grace, III. 183)」によって、或る者たちを、他の者にもまして選別された者として選ぶ。パウロはロマ書 (九 16-18 と十一 31) で、神の選びはもっぱら神の憐れみ (mercy) によると書いている。これによっても、ミルトンの grace が聖書の mercy と同義語であることが分かる。しかし神は、「残りの者」も私の呼びかけを聞き、罪を自覚し、私の怒りを鎮める機会を失しないように警告しよう、という。そして、石のように頑心も

和らいで、「祈り、悔改め、正しい服従」(三190では動詞形で、次行191では名詞形で繰返し強調)へと立返るようにしたい、そのために彼らの心に「良心(Conscience, III. 195)」をおく、良心はいわば万人に与えられた神の声である、この良心の声に耳を傾ける者は、やがて救いを得ることができる、が、神の長い忍耐と恩寵を無視し悔る者は、救いを得ることはできず、頑な者はますます頑なに、盲人はますます盲人となって、やがて躓き、いっそう深みへと堕ちてゆく、このような者以外は、一人として「恩恵(Mercy, III. 202)」より除外されることはない、という。

ここまで人間の救いに関し、神と御子とは、神の予知と人間の自由をめぐって応答を重ねてきた。だが、まだ十字架が語られていない。これこそ一番肝腎なことではないのか。

十字架

But yet all is not done. III. 203.

(しかし、まだすべてが終わったわけではない)

この一行は、まだ付け足すことがある、というのではない、このままでは、まだ何も語ったことになっていない、というのであろう。実際、第三卷五六行から四一五行に至る、神と御子との問答のうちまだ三分の一を語ったにすぎず、三分の二近くが残っている。しかも、その後半の書き出しは、'Man, disobeying, III. 203'で、第一巻の冒頭を想起させる。かつ、この段落の終りは、人間に代って誰か他の者が、死には死をもってする厳しい償いの責めを果たさな

ければ、人間か、さもなければ神の義が死んでしまう、されば、天使たちのなかに、人間の死を贖うために自ら死に、自らは正しいにもかかわらず正しからざる者を救おうとする「そのように深い慈愛 (charity so dear, III. 216)」をもつ者はいないのか、と問うものである。これもまた第一巻冒頭の 'one greater Man / Restore us and regain the blissful seat, I. 4.' を連想させる。

この神の問いかけに対して、すべての天使たちは寂として声なく、だれも「弁明者また調停者 (Patron or 仲保者 intercessor, III. 219)」たろうとするもの、まして自らの命を投げ出して人の死罪を贖い、賠償を払おうと申し出る者はいなかった。もしもこのまま「贖い (redemption, III. 222)」が得られなければ全人類は墮地獄の審判をまぬがれず、永久に亡びなければならぬ。そのとき御子は、溢れるばかりの「聖なる愛 (Love divine, III. 225)」から「仲保 (mediation, III. 226)」の役を申し出る。

先の段落では 'charity (III. 216)' といった。これはラテン語の *caritas* に由来し、ギリシア語の *agape* に当る。ここではこれを 'Love divine (III. 225)' と言ひ換えてゐる。

この僅か一〇行 (三二七―三二六) の間で、ミルトンは、キリストの役割を順を追つて的確に定義している。つまり *patron*, *intercessor*, *mediator* という進行である。 *patron* は、Fowler が *advocate* と注しているが、本来「父 (patron)」のつくその子のため身内の立場から弁明してくれる人である。 *intercessor* は「執成」してくれる人、 *OED* では第一義に 'One who intercedes or interposes on behalf of another; a mediator.' とあり、ミルトンのこの箇所

(三二)を引用している。ここで相手との交渉に入るのである。そして mediator は両者の橋渡しをして、解決を、和解をもたらす人である、'one who brings about (a peace, a treaty) or settles (a dispute) by mediation' (OED, 1)。神学的にはテモテ前書二章五節「神と人との間の仲介者は人であるキリスト・イエスただひとり」があげられる。本来、mediate の語源は「二つに分ける」こと、「二つの等しい部分に分割する」ことあらわし、「不和を調停する」ことを意味するに至る。

patron, intercessor, mediator という移行は、人間の立場に立って弁明し、執り成し、神と人、両者の言い分を聞いたうえで、俗な表現をすれば、それぞれの顔が立つような措置を講じて、和解にこぎつけることである。だが、その結果は、キリストが神の身分を捨て、人となって、しかも極悪人の受けるべき極刑を受けることである。全く罪のないキリストにとって、これ以上の不条理な刑罰はないけれど、人間にとってこれ以上の恩恵はない、人間の一切の罪が帳消しになるのだから。人間は「死んでも生きる」(ヨハネ十一25)ことができるようになり、神は法の一点一画も損なうことなく、人間を赦すことができた(ロマ三26)。

ところで、キリストがみずからに引受けることを申し出た「罰」を、ここでは forfeiture という。この forfeiture の単語は『失樂園』全巻のなかで、唯一回、ここにあらわれるだけであり、かつ欽定訳にもあらわれない語であるから、一言付加したい。forfeit の派生語で、フランス語 *forfaire* to transgress (U. foris outside, facio to do) に由来する。OED が記す forfeiture の第一義は、⁴ '1. Transgression or violation of a law; crime, sin; spec. in Law. Obs.' とある。そこから、「犯罪や契約違反のために財産・生命・権利などを失うこと」を意味し、さらに

⁴ The penalty of the transgression; punishment for an offence. Obs. とし、『失樂園』のこの箇所(三二)を引

用している。

その罰に科せられた賠償が ransom である。が、その語源は redemption である。償い方は一つしか残され
贖い ていない。身代金を払って、囚人の釈放を実現することだけである。ransom と redemption は同義として用
いられるが、*OED* の挙げる第一義は、ransom が誰によっても特定されない一般的な場合を指すのに対し、
redemption は「イエス・キリストの贖罪による罪とその結果からの解放」とある。

御子キリストは、父なる神の思いに応えて父に呼びかける、

Father, thy word is passed, Man shall find grace;

• • • • •

• • He (i. e. Man) her (i. e. grace) aid

Can never seek, once dead in sins and lost;

Atonement for himself, or offering meet,

Indebted and undone, hath none to bring.

Behold me, then: me for him, life for life,

I offer; on me let thine anger fall;

Account me Man: I for his sake will leave

Thy bosom, and this glory next to thee

Freely put off, and for him lastly die

Well pleased; on me let Death wreak all his rage:....

III. 227-241.

父よ、人は恩恵を受くべし、との御言葉は既に発せられました。

・ ・ ・

だが、人は、ひとたび罪のうちに死んで失われたものである以上、
恩恵の援助を求めるときはできません。

己が身の贖い、あるいはふさわしい宥めの供え物は
神に負うて、いまだ返せぬままにて、

人が自力でもたらす術は到底ありません。

それゆえ、どうかわたしに眼をお止めください。彼の代りにわたしを、彼の命の代りに
わたしの命を捧げます。あなたのお怒りをわたしの上に注いでください。

わたしを人間と考えてください。わたしは彼のために、

あなたの懐を離れ、あなたに次ぐこの栄光を

潔く棄て、最後には人間のために喜んで死にます。

どうか「死」には忿怒のたけをわたしの上に揮わせてください。

文中、「贖罪」をあらわす最も一般的な語 'atonement, III, 234' が用いられるが、この語が『失樂園』のなかに現れるのは唯この一回限りである。'atonement' の語源は 'at onement' であり、'onement' は「一つになること」である。この原義をミルトンのテキストのなかに戻すと、人間は「罪のうちに死んで失われたもの」(出典はエペソ二、5とルカ一九10、マタイ一八11) であるから、今さら自分の方から神との一致和解が求められる筋ではない。それゆえイエスは人間のための代理贖罪を願い出るのである。

父なる神もまた、この御子キリストの申出を喜び、やがて時満ちたとき、汝は、処女の子として肉となり、地上の人間のひとりとして、アダムの末裔ながらアダムの代りに全人類の主となって、アダムによっては滅びる全ての人を救ってもらいたい、汝がいなければ一人として救われる者はいないからだ、

His crime makes guilty all his sons; thy merit,

Imputed, shall absolve them who renounce

Their own both righteous and unrighteous deeds,

And live in thee transplanted, and from thee

Receive new life. III. 290-294.

アダムの罪科は、すべての子孫を罪あるものとする。しかし汝の功が
彼らのものに帰せられ、彼らを救うであろう。

彼らは、自己の業は、善なるも、善ならざるも共に捨てさり、

汝のうちに移し植えられて生き、汝から
新たな生命いのちを受けとるのである。

このようにして、至極当然のことながら、人間が人間の罪を贖い、裁かれて死に、死んで蘇り、蘇るとともに、自らの貴重な生命で贖われた兄弟たちを蘇らせるであろう（三294-297）、という。

こうして天上の愛が地獄の憎しみにうちかち、汝は「神にして人、神と人との子、油そそがれた万物の王」（三316-317）として君臨する、ということばかりか、やがては最後の審判を経て新天新地の到来することを予言する。そしてこれらすべてを成就するために死に就かんとするこの者を崇めよ、わたしを敬うごとく、このわが子を崇め、かつ敬え、と父なる神は語る（三274-343）。

このように父なる神と御子との間に交わされた問答、この一面では全く抽象的な神学的論議が、どこまで詩になりうるか、いや、ここまで詩になりえた実例として、まことに興味ぶかい。シヨークロスも「けだし聖書の最も重要なテキストが完璧な詩として、十分な迫力とメッセイジをもって表現された箇所」として、ここを挙げている（三10-11）
Shawcross, *John Milton*, p. 270）。

ところで、このように代贖の死を申し出るキリストの崇高さを、アダムもイーヴも何がしか共有していることを指摘したい。

アダムの死

アダムは神に願って得た妻イーヴが禁制を犯したことを知ったとき、イーヴを失って生きることができない、と思う。一方、イーヴは、自分ひとりが死んだあと、夫アダムが「もうひとり別のイーヴ (another Eve, IX. 828)」と暮らす可能性を考えただけで死ぬ思いだ (A death to think, IX. 830) と嫉妬し、それゆえどんな策を弄してでもアダムに禁断の果実を食べさせようとする。アダムは妻ひとりを死にさせはせず、自分も彼女と共に死ぬ途を選ぶ。

それにしても、イーヴはとっさに「もうひとり別のイーヴ」のことを思い、アダムも、イーヴが話題にしたわけでもないのに、神が「もうひとり別のイーヴ」(911)を造ったとしても、現在の妻イーヴを失って生きることができない、という。人間はまだ二人しかいないのに、二人がそれぞれ自然に another Eve のことを考えると、ミルトンもなかなか偶におけない人間通メンシエンケンネルというべきか。

アダムはイーヴを「肉の肉、骨の骨」といとおしみ、妻との「自然の絆 (The link of nature, IX. 914)」に引かれて死を選ぶことを決意する。もっともそこには蛇の先例もあり、死なないどころか、従来以上のより高い生活ができるのではないかという希望的憶測が混じったり、万物の霊長として造った人間を滅ぼすことによって、神も折角の創造の業をご破算にすることはあるまい、という甘えが混じったりはするが、結局は、「自然の絆 (The bond of nature, IX. 956)」のゆえに、決して妻イーヴから離れはしないと誓う。

アダムは、another Eve を思った直後にそれを打消すように「The link of nature」と言い、とつおいつ思索したあとに「The bond of nature」と言う。「link」から「bond」への移行は、ともに「絆」と訳するより外はないものの、その差異に注目しなければならぬ。「bond」に手枷、足枷、拘引などの意味があるため、「束縛」として否定的な意味にとられ、アダムがますますイーヴの魅力 (female charm, IX. 999) になんががらめになっていったとも解釈されるが、

‘bond’には一面、契約の意味もあり、結婚の契約に用いられる(例えばthe bond of matrimony or marriage)。そしてbondが用いられる『失樂園』のコンテクスト(九⁹⁵²、⁹⁵⁹)、とくに‘Our state cannot be severed; we are one, / One flesh; .. IX. 958-959’は、マタイ伝十九章五―六節のイエスの言葉「この故に神の合せ給ひし者は人これを離すべからず」を連想させる。‘sever’はOEDに‘To part or divide suddenly or forcibly; cut in two, cleave or rend asunder」とあり、強引に無理引き裂くニュアンスが濃い。

一方、『失樂園』でアダムがイーヴをいとおしむ‘flesh of flesh, / Bone of my bone, IX. 914-915’という言葉は、創世記一章23節(欽定英訳では‘bone of my bones, and flesh of my flesh’)に由来する。では、何故、順序が逆転するのか。

実は第八巻、アダムの願いに応えて神に創造されたイーヴが初めて姿を現わしたとき、アダムは聖書の語順どおり‘Bone of my bone, flesh of my flesh, VIII. 495’¹、その喜びを語っている。時間的にはその後であるが、『失樂園』においてはすでに第四巻において、イーヴはアダムに「わたしはあなたの肉の肉」(四41)といい、また逃げる自分を捕えてアダムが、「彼の肉であり彼の骨である」(四483)のになぜ逃げるのか、と言った、という。イーヴの創造は本来は神の恩恵の業であるが、人間の目に見えるのは先ず美しい肉体であり、イーヴの自己本位の意識のなかでは、すでに骨と肉との位置が逆転し、第九巻、まだ墮落以前とはいえアダムはすでにイーヴの意識に感染し、イーヴへの肉欲に傾き、墮落直前には単に‘we are one, / One flesh, IX. 958-959’²のみ言つ。

しかし聖書が「二人にはあらず、一体なり」というときにも、同じ「肉」という言葉を使う(希・羅・英・独・仏語とも)。肉が悪ではなく、ただアプローチが逆だったのである。このように、人間的な、余りに人間的な迷いに翻弄されたものの、アダムの決断は大きく道を過るものではなかった、といえる。妻との死を自から進んで選んだの

である(九167)。

イーヴは、アダムが彼女のために神の怒りを、いや死さえも喜んで受けようとしていること、それほど高められた「この美事な愛情の証 (This happy trial of thy love, IX, 975)」に感動し、彼に抱きつき、喜びの涙を流す。だが、こうして「人間に死をもたらす原罪は犯された (completing of the mortal sin / Original, IX, 1003-1004)」。

ここが全巻のクライマックスであり、最も感動的な場面である。私は、その感動の最大の理由は、アダムがイーヴへの愛のために死を選んだことにある、と思う。御子はアダムを断罪するに際して「神の声を無視して彼女に従うとは、彼女がおまえの神だったのか？ 彼女がおまえの導き手だったのか？」(二〇145-146)と叱る。しかし、もしアダムがイーヴひとりを死なせて自分は生き残ったら、そしてまた、理想的な結婚生活を求めて「もうひとり別のイーヴ」を要求でもしたら、きっと別のお咎めをうけるであろう。読者の響聲を買うことは間違いない。

イーヴ
第十卷は場面が大きく変わる巻である。物語の舞台は、地上から天国へ、そして再び地上の樂園へ、さらに地獄へ、混沌へ、地獄へ、そしてもう一度地上の樂園となる。すなわち、人間墮落の報が守護天使たちによって天国にもたらされると、神は御子を地上に遣わして、アダムとイーヴを審く。しかし御子は彼らを憐れ

に思い、裸身を覆う「獣の毛皮」(二〇221)と、さらに醜い内なる裸には「義の外服」(二〇222)を与えて天に戻る。一方、「罪」と「死」はセイタンの成功を知ると地獄を出て、地上へ向かう広い通路を混沌の上に築く。セイタンの地獄への帰還、万魔殿での戦勝報告、と突然の悪魔軍団全員の蛇体への変形。地上では自然が蒙る調和の喪失。アダムは嘆き、イーヴを恨む。

イヴは溢れる涙を拭おうともせず、髪をふり乱したままアダムの足もとにひれ伏し、その足を両腕でかき抱きながら、彼の赦しを求める。

Forsake me not thus, Adam! witness Heaven

915 What love sincere and reverence in my heart

I bear thee, and unweeting have offended,

Unhappily deceived! Thy suppliant

I beg and clasp thy knees; bereave me not,

Whereon I live, thy gentle looks, thy aid,

920 Thy counsel in this uttermost distress,

My only strength and stay: forlorn of thee,

Whither shall I betake me, where subsist?

While yet we live, scarce one short hour perhaps,

Between us two let there be peace; both joining,

925 As joined in injuries, one enmity

Against a foe by doom express assigned us,

That cruel Serpent. On me exercise not

Thy hatred for this misery befallen;

On me already lost, me than thyself

930 More miserable. Both have sinned; but thou

Against God only; I against God and thee,

And to the place of judgment will return,

There with my cries importune Heaven, that all

The sentence, from thy head removed, may light

935 On me, sole cause to thee of all this woe,

Me, me only, just object of His ire,

X. 914-936

私を見捨てないで下さい(心に懐く愛と敬意に免じて。不幸にもだまされて罪を犯したのも、ついうっかり、悪気があったわけではありません、こうして身を投げ出し、あなたの膝を抱いてお願いします)

あなたの優しい顔、援け、忠告を取り去らないで下さい(この一番苦しいときに、唯一の力であり、支えなのだから、あなたに棄てられたら、どこへ行き、どこで暮らせばよいのでしょうか?)

もう生きていられる時間は少ない、せめて乏しい時間は互にいがみ合わないで、むしろ共通の敵に当りましょう。

だから、どうか憎しみを私に向けしないで下さい(私の方があなたよりもっと惨めなのですから)(括弧内は心中の弁解や動揺)

914行から930行まではやはり今までどおりの自己本位・自己中心的な要求である。だが、生きられる時間が短く死が迫っていることを自覚したときから、現状の事態を惹きおこした責任をもちや他人には転嫁せず、自分に引きうけようとする。

二人とも罪を犯したとはいえ、あなたは神に対してだけだが、私は神とあなたに対して犯した、だから罰はあなたではなく、すべての禍の唯一の原因である私に、私の上だけにすべての罰が下されるように。

死ぬのは自分ひとりで、アダムは生き残ることを願う。わずか二十三行の間に百八十度の方向転換がおこる。さすがにアダムも心を和らげ、二人は和解し悔改めるに至る。こここそ『失樂園』全巻の山場 (Crisis) だ、とテイリヤードはいつづる (E. M. W. Tillyard, 'The Crisis of Paradise Lost' in *Studies in Milton*, p. 40)。

先にはアダムがイーヴのために死を決し、ここではイーヴが、アダムは死を免れ、自分ひとりが死ぬことを申し出る。アダムは、イーヴの死を前提として、イーヴへの愛から、イーヴのために死ぬ決意をするのであるから近松の心中物語を連想させるが、イーヴは、アダムの生を前提として、アダムへの愛から、アダムのために死ぬ決意をするのであるから、イーヴの方が御子キリストに近い。いずれにせよ、この二箇所とも全巻中最も感動的な箇所である。なぜわれわれは感動するのか。その感動の起こって来たる理由は、「人が、その友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」(ヨハネ一五13) というイエスの言葉を実践しようとしているからである。愛の模範はやはりイエスである。ヨハネ第一書三章十六節には、「イエスは、わたしたちのために、命を捨てて下さった。それによ

って、わたしたちは愛とということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のために命を捨てるべきである」とある。

3 × 4 || 12

それを教えるのが『失樂園』最終巻の目的である。第三巻における贖罪問答は、天上において父と御子の間に交わされたもので、人間はまだ知らない。それが人間に告げ知らされるのは、第十一・十二巻になってからである。

先きに第四巻においては初めてアダムとイーヴが登場し、墮落以前の美しい結婚生活(いわゆる unfallen sexuality)が描かれた。それはセイタンをも嫉妬させ、ますます復讐の念を燃えさせた。セイタンは鶴(四196)にも、獅子(四402)、虎(四403)にも、蝦蟇がま(四800)、蛇にもなって、アダムとイーヴの隙をうかがう(鶴・獅子・虎・蝦蟇になるのは、それぞれこの一回限り、蛇は第一巻三四行から、すでに創世記の記事に従って登場、ルーシファと呼ばれた天使の座から地に這う蛇になるまで空間的には下降の一途)。

この第四巻とは対照的に第十一巻に描かれる人類の姿は、さながら地獄絵図で、蟻地獄のようにそこから逃れることができない。しかしここでは、第十巻におけるアダムとイーヴの悔改めと祈りによって、いやむしろ、このような二人の回心をもたらした神の「先行する恩寵 (Prevenient grace, XI. 3)」によって、人間の苦難にも光が射し込んでいる。先きの第四巻におけるアダムとイーヴの眩しいばかりの無垢な牧歌的な生活が暗い死の予想という枠組のなかに描かれているのとは正反対に、苦悩する彼らの子孫は、明るい生の展望という枠組のなかに描かれている。

第十一・十二巻は、樂園追放後のアダムの子孫が辿る運命を語る。第十一巻で天使マイケルが、山上からアダムに見せる光景は、長子カインが弟アベルを殺す場面から始まって、ノアの洪水までである。ノアについてアダムは、天

使マイケルにこう答える、「悪しき子孫たちの一つの世界がすっかり滅ぼされたことを悲しむよりも、むしろ、唯一の人間が完全に正しいと認められたこと、そしてまさにそのゆえにその者から神がもう一つ別の世界を興し、自らのすべての怒りを忘れ去らうとやられてゐることを喜ぶ」と。

Far less I now lament for one whole world
Of wicked sons destroyed, than I rejoice
For one man found so perfect and so just,
That God vouchsafes to raise another world
From him, and all his anger to forget.

XI. 874-878

「ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった」という創世記々事(六九)に由来するものであるが、第十一巻の最後に置かれることにより、ノアは第十二巻最後のイエス・キリストに対応している。第十二巻は、正真正銘の「完全に正しい人」から‘another world’が始まって神が‘all his anger’を吐れる、という物語である。

second 考 第十二巻では‘second’という語が、不思議なほど多彩な働きを見せる。第十一巻の末尾では、洪水によつて一つの世界が滅ぼされると同時に、「完全にして義ただしき」(一一八七六)ノアから「もう一つの世界」(十

一八七)が始まり、もう二度と人類を滅ぼすことはしないという契約が、天にかかる虹をしるしとして与えられる。こ

のようにアダムから「一つの世界が始まって終った」(十二6)のをうけて、第十二巻は、ノアという「第二の本木 (a second stock, XII. 7)」から、人類は再び出発し直すのである。ノアとその一族が「人類の第二の祖先 (This second source of men, XII. 13)」と呼ばれる。

「第二の本木」という表現は第一の本木を前提とし、それがアダムであることは明らかである。したがってノアを第二の本木と呼ぶことは、ノアを「第二のアダム」と呼ぶに等しい。しかし、第二のアダムとは、パウロがキリストを言いあらわすのに用いた言葉である(1コリント十五47)。その上、「本木」という語は、ロマ書第十一章における接木の比喩を連想させる。善きオリブに接木されて善き実を結ぶように、キリストに接木されて、「最早もはやわれ生くるに

あらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」(ガラテヤ二20)という状態を実現することが最高の生活である。

こうして、「完全にして義しき人」ノアが、やがて来たるべきイエス・キリストの「影」(十二233)、前もって指し示す「予型」(十二232)の役割を担うことは明らかである。コリント前書第十五章のパウロの言葉をミルトン流に並べ変えると、「最初の人アダム」(45)、「第二の人」(47) || ノア、「最後のアダム」(45) || イエス、となる。

アブラ だが、ノアとその子孫も、悲しいかなアダムとその子孫の轍を踏んで、たちまち「悪から、さらに悪へ」

ハム (十二106)へと墮ちてゆく。性懲りもなく重ねられる悪事に倦み疲れた神は、「ひとりの信仰深い人間」(十二

113) アブラハムから生まれる民を「一つの特別な民」(十二111)として選ぶ。「至高の神」(十二120)は彼の上に恩恵を注ぎ、やがてすべての国の民が「彼の裔」(十二125)によって祝福されることを意図したもう。アブラハム一代の事蹟を要約した後、もう一度、すべての国の民が「彼の裔」(十二148)によって祝福されると繰返し、そして、この裔こそ、やがてあの蛇の頭を砕くべき「偉大な救主 (Great Deliverer, XII. 149)」だ、という。アブラハムが登場す

ると同時にイエス・キリストへの言及が始まる。それはあたかも曙光がさすと同時に急速に陽の光が増してくるような趣きがある。

アブラハムに始まる親子三代、エジプトへの移住、律法の授与、そしてモーセに導かれてエジプトからの脱出、つまり、故郷カルデアのウル之地（十二130）を離れてからカナン之地（十二269）を所有するに至るまでのイスラエルの歴史が簡潔な筆致で点綴される。天使マイケルの話が一区切りしたところで、アダムが口を挟む、「天より遣わされて、わが蒙昧を啓く者よ」（十二270-271）、「義しきアブラハムとその裔（Just Abraham and his seed, XII: 273）」に関する事柄を明らかにされ、「今初めて私は、自分の眼が眞実に開かれたのを感じる（Now first I find / Mine eyes true opening, XII: 273-274）」、さきほどまでは自分が、また全人類がこの先、どうなつてゆくのかと思ひ悩んでいたが、憂いは晴れ、彼（アブラハムの裔）の現われる日には「すべての国の民が祝福される」様子がさながら臉に浮かぶ、といって喜ぶ。‘all nations shall be blest, XII: 277’は、これで三度（ほかには126と147-148）繰返された。私がここで指摘したいのは、二七三行の‘Abraham’に‘first’である。

私が着目するのは、次に‘second’という語の用いられる場所である。本文中‘The second, XII: 321.’はダビデを指す（注釈者はこれを統一イスラエル王国第二代の王と取る）。彼は敬神と武勇に聞こえ、彼の王統は永続するという約束をうける。そしてこのダビデの王統から、アダムには「女の裔」（十二327）、アブラハムには「すべての国民が依り頼む者」（十二328-329）、また王たちには「最後の王」（十二329-330）と預言された「一人の御子」（十二327）が現われる、最後の王とは、その治世に終りがないからだ、という。

A Son, the Woman's Seed to thee foretold,
Foretold to Abraham, as in whom shall trust
All nations, and to kings foretold, of kings
The last, for of his reign shall be no end.

XII. 327-330

そして次の行は、

But first a long succession must ensue;
And his next son, for wealth and wisdom famed,...

XII. 331-332.

と続く。his next son は名前こそ挙げられないが、前後関係からソロモンを指すことは明らかである。ダビデを第二代の王というが、先王サウルとは血の繋りもなく、むしろ敵対関係にあって王位を受けついだのだから、イスラエル王朝第二代の王という意味を強調する理由はない。むしろダビデ王家第一代という感が強い(十二³³¹)。

それにまた、その十行前にはモーセとヨシュアの記事があり、イスラエルの民を約束の地カナンへ導いたのは、律法を司るモーセではなく、その後継者ヨシュアの方であった。ヨシュアのギリシア語名はイエスといい、そのカナン移住は「やがて敵なる蛇を打ち破り、この世の荒野を越えて、永らく彷徨^{さまよ}える民を安らかに憩いにみちた永遠の楽園

へ連れもどし給う」(十二311-314) イエスの任務を先取りするものである、という。

こうしてみると273行目でアブラハムの名があげられて以来、330行目まで、そのなかにイエスの名をはさみながら、読者の注意は確実に、かつ強力に救主イエス・キリストへ向けられてきた。321行の行頭に「The second」、330行行頭に「The last」とあり、それゆえfirstを探して溯れば、やはり273行目のアブラハムに行きつく。

Abraham——first, David——second, Jesus——last

という順序はマタイ伝冒頭「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」を想い出す。新約聖書はこの言葉で始まるのである。『失樂園』第十二巻は、この系図をいくらか肉づけしただけの文章である。指さすのはただ「神の子イエス・キリストの福音」(マルコー1)である。

新約にもう一箇所、マタイ伝とは逆に、イエスから溯る系図がルカ伝にある(二三38)。ここでは順次溯って、父の名をあげる。いわば「イエスの父ダビデ、ダビデの父アブラハムの系図」である。しかし、マタイ伝と異なり、ルカ伝はさらにその先の先祖をあげる。かのノア(ルカ三36)を経て、アダムに至る。そして「このアダムは神の子である」(ルカ三38)とある。

因みにノアと同じように「完全く、かつ義しき人」と記されているのはヨブである(ヨブ記一1)。しかしヨブはイエスの直系の先祖ではない。つまり、どの家系にも、ノア(Just... and perfect, Gen. 6. 9)と並ぶヨブ(perfect and upright, Job. 1. 1)のような立派な人物がいるものである。エゼキエル書ではもう一人ダニエルをノアとヨブの中間に

挟んでいる。しかし、「たとえ、そこに、かの三人の人物、ノア、ダニエル、ヨブがいたとしても、彼らは自分たちの義によって自分の命を救いうるだけだ」(エゼ十四14)、「彼らは自分の息子、娘たちすら救うことができない」(エゼ十四20)とある。救い主への待望の大きさが推し測られる。イエスは形としてはアダムの子孫であるが、「第二のアダム」(ロマ五12+21)、全く新しい神の子である。

不思議なことだが『失樂園』のなかに「キリスト」という言葉は登場しない。「イエス」さえ、僅かに二回(十183、十二310)だけである。ただし「メシア(Messiah)」とか「裔(Seed)」とか呼ぶ場合は多い。いまだ新約の時代ではないという時代設定のためかもしれない。が、キリストの原義を示すように「頭に油を注がれた真の王即ち救世主(the true/Anointed King Messiah, XII: 358-359)」という。時満ちて、いよいよ御子の誕生である。未だ見たことのない星が大空に現われ、東方三博士の訪問、処女なる母への賛美、「かくして神は人と一つになり給う(so God with Man unites, XII: 382)」。

アダムの墮落以来、いわば人類発生以来、「女の裔」は蛇の頭を砕き、蛇は彼の踵を砕く、と言われてきた(創世記三15)。これは彼がセイタンその者を亡ぼすことではなく、人間のうちに働くセイタンの業を亡ぼすことを意味する、と『失樂園』の天使マイケルはいう(十二394-395)。

人間は死の刑罰を条件として課せられた神の律法に従わなかった、その結果、罰として死を免れることはできない。しかし御子は従順と愛(愛だけが律法を完成する)をもって律法を実行する。また肉の姿をとって恥ずべき生と詛われた死に至るまで人間のうけるべき罰をうける。この彼の贖い、すなわち彼の従順は信仰によって人間のものとされ、人間の従順となること、彼の功績が(たとえ律法になっても、人間の業ではなく)人間を救うことを信ずる、すべ

つゝの罪に生命を償ふべき。

The law of God exact he shall fulfil

Both by obedience and by love, though love

Alone fulfil the law: thy punishment

He shall endure, by coming in the flesh

To a reproachful life and cursed death,

Proclaiming life to all who shall believe

In his redemption, and that his obedience

Imputed becomes theirs by faith; his merits

To save them, not their own, though legal, works.

XII. 402-410.

そのために彼は憎まれ、罵られ、捕えられ、裁かれ、死刑を宣告され、自らの同胞によって十字架に釘けられる。まさに生命をもたらすために殺される。だが、彼が彼とともに十字架に釘けたものは、律法であり、罪であり、これらが、彼の贖いを信する者を害することはない。

死もはや彼の上に力を揮いえず、三日目の朝には復活、そして直弟子たちに福音の伝道を委託する。ここでもう一度、最後に止めをさすかのように

So in his seed all nations shall be blest. XII. 450.

と繰返される。全く同じ言葉がこれで実に四回目である。his¹はアブラハムを指し、アブラハムの血をつぐ子孫に對してだけでなく、全世界の「アブラハムの信仰の子孫 (the sons/Of Abraham's faith, XII. 448-449)」に主の救いが說かれるからだ、という。blest²が「血で清める」から来ていることは、すでに述べた。

そしてこの後に、昇天と再臨が続く。それに応えるアダムの歎びも含めて、これ以降、つまりイエスの誕生から始まって最終行に至るまで、『失樂園』の結びは、ベートーヴェン第九交響曲、最終楽章の「歎喜の合唱」を思わせるものがある。

ここまでイエスは誰であるか、を問うてきた。「イエスはキリストである」が、その答である。それなら、イエスはどうな人か？ どういう人であればこそ、神の御子、神の名代として、創造者でもあり審判者でもある、この光輝燦然たる資格を得てきたのか？

第三巻がキリスト論の「理論篇」といえるなら、第十二巻は「実践篇」あるいは「応用篇」と呼べるかもしれない。もちろんわれわれにとつては旧新約聖書に読む過去におこった歴史の叙述ではあるが、ここでは天使マイケルがアダムに對し未来におこるべき出来事の預言として語っている。かくしてイエスの誕生から再来までの、まさに過去・現在・未来も扱われ、教会の墮落にも言及する。

神の子イエス・キリストの福音を伝えるべき教会のなかにさえ悪の力は強く、「金錢欲や野心 (lucre and ambition,

XII. 511)「ごとうごしかれ、」[名譽や地位や称号 (names/Places, and titles, XII. 515-516)]を「の利益になるように悪用する」狼やも (wolves, XII. 508)「(使徒行伝110章に因む)が現われる。一方、あくまで「靈と眞マコト (Spirit and Truth, XII. 539)「(ヨハネ四24)とをまつて神を拝するすべての者に対しては激しい迫害がおこる。」

彼が何によつて「神の子」であつたかは、すでに第三巻において語られていた。生得の権よりも功績キコトによつて、偉大もしくは高貴であるところより善であることによつて、栄光がみち溢れている以上に愛がみち溢れていることによつてであつた。一語でいえば「低くなること」(三313)によつて高くなつたのである。

(thou) hast been found

By merit more than birthright Son of God——

Found worthiest to be so by being good,

Far more than great or high; because in thee

Love hath abounded more than glory abounds;

Therefore thy humiliation shall exalt

With thee thy manhood also to this throne:...

III. 308-314.

出自の栄光にみちた偉大・高貴という性質よりも、善であること、愛に溢れているという個人の価値によつて、神の子・万物の王(三316-317)として一切を支配しようとするというのである。

「父を見た者は一人もない」(ヨハネ六46) しかし

「御子のなかには父なる神のすべてが実体として具現され輝いていた。彼の顔には憐れみと愛と恵みが、見るからに鮮やかに現われていた」(『失楽園』三139-142) それゆえ

「わたしを見た者は、父を見たのだ」(ヨハネ一四9)

ところで御子を目のあたり見たのは、「この世に生きておられたとき常に従っていた使徒たち」(十二438-439) だけである。御子は彼らに、彼らが彼について学んだことを後の世に教える責務を託した(十二439-440)。それは生と死の両面にわたる。生は「罪の穢れから洗い潔められた清らかな生活」(十二443-444) を送ることであり、死は「時に臨んで、贖罪主あがなぬしの死にも似た死を迎える心構えをもつ (in mind prepared, if so befall, /For death like that which the Redeemer died. XII. 444-445)」とつうことである。洗礼がそのしるしである。

人間の生死は、人間の自由になるものではない。だれひとり「己のために生ける者なく、己のために死ぬる者なし」(ロマ十四7) である。さればこそ「生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ」(十四8) のでなければならぬ。「生くるも死ぬるも我らは主のもの」であるからである。

われわれは最近とくにおびたしい死を見た。死者自身が、その死の意味を知らないときにも、その死には深い意

味があった、また、そうでなければならぬ。キリストの死が贖罪の死であったように、それはキリストの欠けたるを補う贖罪の死であった、と考えるべきであろう。それ以外の解釈は結局不可知論かニヒリズムに行きつくだけである。

(続く)